



## 荒尾高校ラグビー部

守備と絆の固さが強みのチーム。昨年11月、県予選決勝で因縁のライバル熊本西高校と対決。25-20で荒尾高校が優勝し、全国大会出場を決めました。写真（提供：荒尾高校）はそのときのもの。

「たくさんの人に支えられて、このメンバーでプレーできたことに感謝の気持ちでいっぱいです。高校を卒業しても、ラグビーが教えてくれた感謝の気持ちを大切に、人の役に立てる大人になりたい」木庭拓海主将と江口諒副主将は凛としたまなざしを見せます。

昨年、荒尾高校ラグビー部は2年ぶり7回目の全国高等学校ラグビーフットボール大会への出場を果たしました。結果は惜しくも初戦敗退。「試合が終わる瞬間まで集中力を維持できなかった」と、悔しさをにじませます。しかし、高校ラグビーの聖地・花園で荒尾ファイティーンは確かな足跡を残しました。

「ラグビーは選手が主体となり、考えて動く競技。だから、面白いんです」試合中、選手たちは監督から指示をもらうのではなく、自分たちで考えたサインで相手ディフェンスを突破します。そのため、日頃からあいさつやごみ拾いなどに力を入れています。そうすることで、日常生活の中で小さな気

づきを積み重ね、プレーに生かすことができるのです。

小学生を対象に行っているタグラグビー教室では「どうすれば子どもたちに楽しんでもらえるか」と、いつも選手たちは試行錯誤しています。このこともプレーでの判断力につながっているそうです。

「実力主義のため、1・2年生のレギュラーが多いチームでした。けれど、だからこそ、チーム力を高めることができました」練習では全員がライバルですが、普段は仲の良い選手たち。つらいときは励まし合い、切磋琢磨して力をつけてきました。「二人一人がチームのことを考え、みんながチームを良くしよう」と最大限頑張ってくれました」と、チームメイトをねぎらいます。

「歴代の先輩たちが成し遂げられなかった全国ベスト16位に入り、自分たちを超えてほしい」選手たちの思いは、残り2年となった荒尾高校と新たに開校する岱志高校の後輩たちへ受け継がれ、きつとかなえられるはず。